令和６年度

人間生活学研究科（博士前期課程）

問題・出題の意図・解答のポイント

令和５年８月26日

高知県立大学大学院

筆記試験Ａ

設問は３問あります。この３問の中から１問を選択し、解答しなさい。

（200 点）

問１　表１は、顔と両手を露出した状態である栄養素（ここでは栄養素 X とする）を 5.5 μg 産生するために必要な日照曝露時間を示している。「日本人の食事摂取基準（2020 年版）」策定検討会報告書では、表１を示し、これを考慮した上で、栄養素 X の基準を策定している。この栄養素 X とは何か。また、上記を踏まえて、栄養素 X の基準を活用する際に留意すべき点について、例を挙げてあなたの考えを述べなさい。

表１　5.5 μg の 栄養素X を産生するために必要な日照曝露時間（分）

測定地点（緯度）	7月			12月		
	9時	12時	15時	9時	12時	15時
札幌（北緯 43 度）	7.4	4.6	13.3	497.4	76.4	2,741.7
つくば（北緯 36 度）	5.9	3.5	10.1	106.0	22.4	271.3
那覇（北緯 26 度）	8.8	2.9	5.3	78.0	7.5	17.0

＊出典：厚生労働省「日本人の食事摂取基準」策定検討会　日本人の食事摂取基準（2020 年版）「日本人の食事摂取基準」策定検討会報告書、2019（https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/000586553.pdf, 2023.7.31 アクセス）　一部改変

【出題の意図】

「日本人の食事摂取基準 2020 年版」の策定の根拠に関する知識や理解を問うとともに、栄養素の特性を踏まえた活用の仕方についての考察力を問う。

また、論理的に記述する力、文章表現力、知識の応用力などを問うものである。

【解答のポイント】

以下の点を評価のポイントとする。

１．栄養素 X について正答していること。

２．栄養素 X の特性を踏まえた活用の仕方について論理的に説明していること。

問２　「地域共生社会の実現のための社会福祉法等一部を改正する法律」（令和３年４月施行）により、地域共生社会の実現を図るため、地域住民の複雑化・複合化した支援ニーズに対応する市町村の包括的な支援体制の構築が推進されている。「地域共生社会の実現」とは、どのような社会の実現をめざすことを意味するのかを論じなさい。また、地域住民が抱える生活課題が複雑化・複合化している具体例を挙げながら、「包括的な支援体制の構築」を図るとはどういうことかについて、あなたの考えを述べなさい。

【出題の意図】

「地域共生社会の実現のための社会福祉法等一部を改正する法律」(令和３年４月施行)により、高齢者・障害者・児童・生活困窮者などの垣根を超えて差別のない地域社会を形成するために、住民も他人事ではなく「我が事」として地域生活課題を捉え直し、専門職も多職種が連携しながら一人ひとりの生活を「丸ごと」捉え直すことが求められている。一つの世帯における複数の課題(8050 世帯や、介護と育児のダブルケアなど)や、世帯全体が地域から孤立している状態(ごみ屋敷など)にみられるように、地域生活課題が複雑化・複合化している。そのため、従来の属性別の支援体制では対応が困難で、相談支援、参加支援、地域づくりに向けた包括的な支援体制が求められており、そのことへの考察力を問う。

また、論理的に記述する力、文章表現力、知識の応用力などを問うものである。

【解答のポイント】

以下の点を評価のポイントとする。

1.「地域共生社会の実現」とは、どのような社会の実現をめざすのかについて総合的に考察し、説明していること。
2. 地域生活課題が複雑化・複合化していること、さらにその課題解決に向けた「包括的な支援体制の構築」について論理的に説明していること。

問３　書籍やインターネットを通じての「異文化理解」と、現地に赴いての「異文化理解」の違いについて、両者を比較し、具体例を示しながら、自分の専門分野の観点から論じなさい。

【出題の意図】

「異文化理解」を行う媒体の違いは、理解できる「異文化」の内容の違いにも反映される。この点について、具体例を示し、考察する力を問う。

また、論理的に記述する力、文章表現力、知識の応用力などを問うものである。

【解答のポイント】

以下の点を評価のポイントとする。

1. 書籍やインターネットを通じての「異文化理解」と、現地に赴いての「異文化理解」の違いについて、具体例を示して説明していること。
2. 1.で挙げる具体例をふまえ、自分の専門分野の観点から「異文化理解」の違いを論理的に考察していること。

筆記試験Ｂ

問　世界経済フォーラムの「グローバル・ジェンダー・ギャップ報告書（2023）」によると、日本の「ジェンダー・ギャップ指数」は 145 カ国のうち過去最低の 125 位だった。性的マイノリティー（LGBTQ）をも含めた多様性の確保において、日本社会にはどのような課題がみられるか、具体例をあげて論じなさい。そのうえで、栄養・生活学、社会福祉学、文化学のいずれかの学問領域の観点から、どのような対策を講じうるか、あなたの考えを述べなさい。

（200 点）

【出題の意図】

ジェンダー・ギャップの理解と日本社会における課題の把握、学問的見地に基づいた対策についての考察力を問う。

また、論理的に記述する力、文章表現力、知識の応用などを問うものである。

【解答のポイント】

以下の点を評価のポイントとする。

1．ジェンダー・ギャップについて的確に理解し、日本社会に潜在する課題を具体的に論じていること。

2．ジェンダー・ギャップを改善する対策について、自分の専門領域の知見から論理的に記述していること。